



学校だより

2月号

横浜市立大道小学校

令和5年1月31日



← 学校 WEB ページはこちらから

副校長 山方 健一

相手を思いやる 「想像力」

先日、4年生が総合的な学習の時間に、「アイマスク体験」と、ブラインドサッカーやサウンドテーブルテニスなどの「パラスポーツ体験」をしていました。子どもたちは、二人一組になってアイマスクをしたペアの子をもう一人が誘導したり、互いに声をかけ合いながら音を頼りにスポーツを楽しんだりしました。このような体験をした子どもたちが、どんなことを感じたのか気になり、活動後に書いたふり返りカードを見せてもらいました。



多くの子は、視覚的な情報がないなかで歩行することや、適切に補助することの難しさを感じたようでしたが、そのなかに、友達のちょっとした言葉かけで安心したこと、体験したパラスポーツにはどんな人でも楽しめる工夫がある、という気付きもありました。この学習のねらいは、「相手の立場にたって考え“想像する”こと」、また、「どんな配慮や助けがあれば、目の前に立ちはだかる不自由な状況や壁をなくしていけるか。(小さくしていけるか。)」を考えることなのだと思います。

学年の校外学習に引率したときやなかよし活動などの場面で、大道っ子のやさしさや思いやりの気持ちに感心させられることが多々あります。それは、周りの友達が困っている様子に気付くと「どうしたの。」とすすんで声をかけ、話を聞き、「〇〇してみるのはどう？」と相手の意を汲んで寄り添った対応ができる、そんな姿です。大道っ子の柔軟さのあるやさしさを目の当たりにしたとき、私自身がかつて遭遇したある場面を思い出しました。

それは、近所のスーパーに行ったときのこと、私が歩いている前方に車椅子に乗っている方が、止まって何となく困っていらっしゃるように見えました。自分にも何かできないかとお声をかけようと思って歩いていくと、その前にいた方が先に「何かお手伝いすることはありますか？」と声をかけられました。すると、声をかけられた方は、「いえ、結構です。ありがとうございます。」とおっしゃって、お互いに挨拶を交わして、その場を去って行かれました。

私は、そのやりとりを目にして一瞬はっとしました。先に私が声をかけていたら、きっとそのような言葉ではなく、初めから「何かしよう」という、少々相手が迷惑や負担に感じるような言葉かけをしていたのではないかと思ったからです。相手の立場を心から思い、どうすることが最適かという「想像力」を働かせたとき、初めて思いやりにつながる行為になるのではないかと感じた瞬間でした。

私たちは、自分とは異なる立場や境遇をもつ人との関係性のなかで生きています。当然、ものの見方や考え方も同じではありません。そのなかで、相手の気持ちを察し、思いやりに基づく「想像力」を働かせていくことが大切であることを大道っ子の日々の姿を通じて改めて痛感します。

「心のバリアフリー」や「心のユニバーサルデザイン」という言葉でも表現されることがありますが、今後も大道小学校がすべての子どもたちにとって居心地のよい、安心できる場所であり続けられるよう、相手を思いやる「想像力」と実践に移す行動力を育みながら、子どもたちが様々な人たちとつながっていく手助けをしていきたいと思えます。